

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520221

研究課題名(和文) 本居宣長の国学の受容と国文学の成立に関する総合的研究

研究課題名(英文) The overall reserach about the relationship between the receipt of Kokugaku of MTOORI NORINAGA and the Formation of Japanese literature

研究代表者

田中 康二 (TANAKA, KOJI)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：90269647

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は5年間の研究成果として、平成27年12月25日にペリカン社より『本居宣長の国文学』を出版した。当該書はまず宣長の著作、『古事記伝』『古今集遠鏡』『新古今集美濃の家づと』『源氏物語玉の小櫛』『玉あられ』が同時代および後世にいかに関与を受け止められ、継承されたかという点を追究した。次に、国文学研究史上における宣長の役割として、本文批判・俗語訳・文学史・「物のあはれを知る」説・係り結びの法則という方法を確立する過程を追究した。そして、日本文学の研究は、古代中世の歌学を発端として、近世の国学を転機とし、近代の国文学研究につながっていくことを立証した。

研究成果の概要(英文)：I published 'Japanese literature by Motoori Norinaga' from Perikan-sha December 25, 2015, as study results of the present study of five years on. In this book I argue how the contemporary readers and the posterity readers accepted five commentaries of Norinaga. Then I argue what is his five research methods. I concluded that Japanese literature of research, as beginning the ancient medieval poetry, as a turning point the Kokugaku of early modern times, will lead to the modernization of Japanese literature research.

研究分野：日本近世文学

キーワード：本居宣長 古事記伝 古今集遠鏡 新古今集美濃の家づと 源氏物語玉の小櫛 玉あられ 本文批判 俗語訳

1. 研究開始当初の背景

昨今、近代に成立した「国文学」という学問領域の有効期限が切れ、国際化(グローバルイズム)の流れの中で制度疲労を起しているという批判を耳にする。だが、それは「国文学」が近世に成立した「国学」から生まれたにもかかわらず、近代化の波の中をうまく遊泳したことを念頭に置けば、懸念にも値しないことである。国文学と国学との関係性の中に転換期を乗り切るヒントが隠されている。

そもそも国文学が国学を母体としていることは周知の事実であるが、それがどの程度の影響関係であるかとなると、実は誰もそれを実証した者はいない。国学の中でも、とりわけ本居宣長の構築した国学は国文学の成立にとつともなく大きな影響を及ぼしているけれども、依然として近代以前の国学と近代国文学の間には、大きな溝があり、高い壁があるように思われている。

そのような状況を打破するためには、一度原点に立ち返って、国文学が宣長国学から何を引き継ぎ、何を切り捨てたのかということを実証的に検討してみる必要がある。そうすることによって、国学と国文学との連続面と断絶面の両方を明らかにすることができるだろう。そして、そのことは平安朝以来の「歌学」が近世の「国学」を経由して、近代の「国文学」へとつながる道筋を明確にすることにも寄与すると考える。

申請者はこれまで本居宣長や村田春海といった国学者の研究を続けている。科学研究費による研究としては「近世後期都市江戸における歌壇・結社の研究」(若手研究(B)、2002年~2004年)や「大東亜戦争期における本居宣長受容の総合的研究」(基盤研究(C)、2006年~2009年)を課題として研究を遂行した。前者の成果として『江戸派の研究』(汲古書院、2010年)、後者の成果として『本居宣長の東亜戦争』(ペリかん社、2009年)がある。科研費の両研究、およびその成果としての両書とも、国学および国学者を扱っているが、その活動の範囲はいわゆる文芸的領域(文学)にとどまらず、「道」をめぐるなされる議論にも及ぶ広範囲なものであった。それは日本思想史や日本近世史、近代史などの専門家によって明らかにされてきた成果や最新の見識を援用することによってはじめて成り立つ研究である。また、文学研究と思想史研究の統一を目指し、『本居宣長の思考法』(ペリかん社、2005年)を著した。当該書は、国学を文学と思想の両頭を有する学問領域と規定し、双方の方法論を融合することによって、国学本来の属性を顕在化させることを試みた。

このような研究の蓄積を背景として、以下の研究計画を思い立った。

2. 研究の目的

国学は国文学研究のルーツであるといわ

れるが、その内実はあまり解明されていない。とりわけ、本居宣長の古典注釈は国文学研究の基礎となっているが、それがいかに継承されて現代の形になったのかという問題は、その重要性に比して著しく解明が遅れていると言ってよい。そこで本研究は本居宣長の諸著作が近世後期にいかにか読まれ、近代以降にいかにか受容されたかという点を、徹底的に資料調査と収集を行い、残存資料を整理・分析することによって明らかにしようとするものである。この研究により、幕末維新期にパラダイム・チェンジしたとする国学観を大きく修正することができる。

本研究において研究期間内で行うことは、まず近世後期においては国学関係の未翻刻資料の調査・収集とその資料の整理・分析であり、次に近代期においては国文学関係書の入手と徹底的な読み込みによる国文学成立モデルの構築である。

まず国学関係書の分析は、『古事記伝』を例にして記述したい。宣長が後半生をかけて執筆し、完成させ、刊行した『古事記伝』は古事記の最初の本格的注釈書である。膨大な分量の参照文献を用いた考証は、現代でも通用する正確さを有しており、文献学的に見ても正確無比な手続きをとっていると言ってよい。この注釈書に対して、宣長の門弟は多くの書き入れを行なっている。それは宣長の門弟が『古事記伝』をテキストとして講義を行なった時に、受講生が行なった書き入れであることがわかっている。というのも、各地に点在する『古事記伝』を校合すると、たとえば「大平翁曰く、……」というような書き入れが散見されるが、それが一本だけでなく、複数の書き入れに共通する内容なのである。これは明らかに『古事記伝』が近世後期において講義テキストとして使われており、受講生がその講義内容を書き入れていたことの紛れもない証拠である。日本全国の図書館・文庫に蔵される『古事記伝』に対して、かつて講義等で師説を書き入れた箇所を残らず収集することによって、宣長の死後に『古事記伝』がいかにか読まれたかということが明らかにされると思われる。このような現象はもちろん『古事記伝』だけに限ったことではない。むしろ、『古今集遠鏡』や『新古今集美濃の家づと』などといった和歌注釈にこそ多く見出せるものである。和歌を詠むために和歌の注釈を学ぶのである。鈴屋門の国学者は一人残らず歌人であった。こういった版本への共通書き入れを特定し、それが講義という場で生み出されたものであることを突きとめた上で、それを一つの作品について漏れなく収集することを目指したい。そうすれば、近世後期において、宣長注釈書が門弟筋でいかなる読まれ方をしたかが浮かび上がってくると思われる。

3. 研究の方法

本研究は本居宣長の国学が近世後期と近

代前期とで、いかに受容されたかという点を明らかにするために、次のことを順次行う。まず、宣長の著作を対象にして、直接これを反論・批判したり、増補あるいは補遺という形で継承したりした、同時代および宣長没後の受容の実態について、著書（書籍）を悉皆調査することによって明らかにする。次に、全国の図書館・文庫に所蔵される、宣長の各著作の版本に書き入れられた内容を調査・収集する。その書き入れ箇所に通ずる内容を含む場合、それを抽出して整理・分析する。第三として、近代における中学校の教科書への書き入れを調査・収集する。これも版本と同様の作業工程で行う。この三つの膨大な作業を通して宣長の学説がいかに受容されたかということが判明する。そのデータに基づいて、本文批判・文学史観・俗語訳・文学論（ものあはれを知る説）・語学説（主に係り結びの法則）の五つの観点から、近世後期と近代前期を通じてどのように受容されたか、ということをはっきりと示し、論文発表をする。

研究期間内で行う内容を具体的に記すことにしよう。宣長の刊行著作である『古事記伝』・『古今集遠鏡』・『新古今集美濃の家づと』・『源氏物語玉の小櫛』・『玉あられ』を対象として、この5点の著作について、最初に底本とするものを選び、それを基準にして書き入れ内容を増補することとする。なお、底本は現在本居宣長記念館に蔵されている手沢本とする。宣長が版本執筆に先立って鈴屋で講義した内容を知るところから始めるのである。『古事記伝』の場合は再校本が残存しており、その複製は神戸大学図書館ですでに購入済みである。これに基づいて、版本への書き入れを収集する。『古事記伝』は大部ではあるが、難解であるだけにかえって書き入れはバリエーションが少ないことがすでにわかっている。案外早々に片付くかもしれない。また、『古事記伝』への批判書はいくつかある。橘守部『難古事記伝』と富士谷御杖『古事記灯』である。これらはかなり特異な注釈ではあるが、『古事記伝』についてのある種の読み方を示していると考えることができよう。

次に『古今集遠鏡』の場合は、版本そのものへの書き入れもさることながら、この著作を増補した著作があるので、これを底本とする。それは山崎美成『頭書古今集遠鏡』である。この他にも中村知至『古今集遠鏡補正』などもあり、受容の実態が目に見える形で明らかである。もちろん、これらに基づきながらも版本への書き入れを収集して、それらの書き入れ内容を相対化する視点を保持することとする。

さらに『新古今集美濃の家づと』の場合は、『古今集遠鏡』と同様に後に出版された批判書がある。石原正明『尾張の家づと』である。版本はすでに入手済みである。この版本には『美濃の家づと』を欄外に書き入れてあり、受容の姿がうかがえる。これ以外にも『美

濃尾張家づとくらべ』や『美尾つくし』といった、二つの注釈書を比較・考量した写本があることもわかっている。これらの稀少写本によっても、宣長の学説の受容の様相が明らかになる。

第四として、『源氏物語玉の小櫛』の場合は、版本そのものへの書き入れもさることながら、この著作を増補した著作があるので、これを底本とする。それは鈴木胤『源氏物語玉の小櫛補遺』である。この他にも橘守部『湖月抄別記』や萩原広道『源氏物語評釈』などもあり、受容の実態が目に見える形で明らかである。もちろん、これらに基づきながらも版本への書き入れを収集して、それらの書き入れ内容を相対化する視点を保持することとする。

最後に、『玉あられ』の場合は、本文の受容というより、「玉あられ」論争とでも称すべき論争の実体を解明することを先決としたい。それは江戸派『玉あられ論』『玉霰付論』を嚆矢とする。これに触発されて、三井高蔭『弁玉霰論』や萩原広道『小夜しぐれ』、あるいは井上文雄『伊勢の家づと』・中島広足『玉霰窓の小篋』などもあり、受容の実態が目に見える形で明らかである。もちろん、これらに基づきながらも版本への書き入れを収集して、それらの書き入れ内容を相対化する視点を保持することとする。

さてこれらと並行して、それぞれの著作に対応する形で、本文批評・俗語訳・文学史・文学論・文法論という文学研究の方法における宣長の意義について、中世歌学から近代国文学に至る流れの中に位置づけることとする。

4. 研究成果

本課題研究は、以下の成果を得た。

(1) 本居宣長の著作の受容史
(2) 国文学研究史上の本居宣長の役割
それぞれについて詳述する。(1) 宣長の著作の受容は、刊本『古事記伝』『古今集遠鏡』『新古今集美濃の家づと』『源氏物語玉の小櫛』『玉あられ』について、それが同時代および後世にいかに関与せられ、継承されたかという点を追究した。『古事記伝』は御杖・篤胤・守部が批判的に継承した。『古今集遠鏡』は景樹や知至等は批判し、美成は増補する形で称揚した。『新古今集美濃の家づと』は門弟との問答や春海からの批判を経て、正明『尾張廻家苞』が出るに及んで、完膚なきまでに批判された。『源氏物語玉の小櫛』は胤が補遺を出し、守部が批判し、広道が宣長の精神を受け継いで創造的な注釈書『源氏物語評釈』を刊行した。『玉あられ』は『玉あられ』論争と呼ばれる論争に発展する契機になった。春海や千蔭が匿名で批判し、高蔭がそれを受けて立ち、広道や文雄、広足は補遺や増補をした。近代以降は歴史的役割を終えた。

(2) 国文学研究史上の宣長の役割は、本文

批判・俗語訳・文学史・「物のあはれを知る」説・係り結びの法則など、近代国文学における基盤となる手法について、宣長がいかにか先進的な考えを持っていたかを追究した。本文批判については、厳格な手続きに拠りながらも直観による誤字の認定をおこなった。俗語訳については、古今集歌の全歌の全文口語訳という前代未聞の取組みをおこなった。文学史については、国学者の中では珍しく中世文学を認める立場を取り、同時代の作品にも古典文学作品に通じる価値を見出すことによって、上代から当代までの通史を構築した。「物のあはれを知る」説は、恋愛論・認識論・共感論といった近代人文学を先取りする考え方であった。係り結びの法則については、膨大な用例の整理・分析により、中世以来の詠歌の作法から言語法則へと昇華させた。

以上のようにして導き出された結論により、以下のようなことが展望される。まず、近代国文学が成立して百数十年経た今、とりわけ太平洋戦争の敗戦を挟んで、国文学研究の方法が国学的手法から徐々に変容してきたことが挙げられる。敗戦の前後でいかなる要素が変わったのかということは追究する必要がある。次に、大学における国文学研究と中等教育における国語科教育との連続面と断絶面が焦点となる。概して中等教育における国語科教育は国文学研究の成果から数十年遅れて伝わると言われる。そのような齟齬をいかにして解消するか、それとも別個のものとしてよいのか、という問題である。このことを議論するためには、国文学研究者と国語科教育研究者との共同研究の場が必要となるだろう、第三として、近世国学から近代国文学に至る道筋は、仮説ではあるが、示し得たと考えるが、近世国学成立以前にも中世歌学があり、それ以前にも学問が存在した。それらを通する「日本古典学」という一筋を構想することが重要であるとする。以上の三点を本研究を経ての課題として提出させていただきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 14 件)

田中 康二、係り結びの法則成立史、紀要(神戸大学文学部) 査読無、42号、2015、pp.1-42

田中 康二、『源氏物語玉の小櫛』受容史、日本文藝研究(関西学院大学日本文学会) 査読無、66巻1号、2014、pp. 1-38

田中 康二、宣長国学における歌 敷島の歌・うひ山ぶみ・著書名、日本思想史学、査読有、46号、2014、pp.17-25

田中 康二、『玉あられ』成立史、渾沌(近畿大学文芸学研究所) 査読有、11号、2014、pp.1-36

田中 康二、本文批判成立史、紀要(神

戸大学文学部) 査読無、41号、2014、pp.1-41

田中 康二、俗語訳成立史(下)、日本文藝研究(関西学院大学日本文学会) 査読無、65巻2号、2014、pp.19-34

田中 康二、本居宣長の文学史研究、鈴屋学会報、査読有、30号、2013、pp.27-42

田中 康二、俗語訳成立史(上)、日本文藝研究(関西学院大学日本文学会) 査読無、65巻1号、2013、pp.17-37

田中 康二、「物のあはれを知る」説の近代 文学史と思想史を架橋する、アナホリッシュ国文学、査読無、3号、2013、pp.4-12

田中 康二、『美濃の家づと』受容史、日本文藝研究(関西学院大学日本文学会) 査読無、64巻2号、2013、pp.1-46

田中 康二、『古事記伝』受容史、紀要(神戸大学文学部) 査読無、40号、2013、pp.1-35

田中 康二、『古今集遠鏡』受容史、日本文藝研究(関西学院大学日本文学会) 査読無、64巻1号、2012、pp.1-43

田中 康二、幕末勤皇歌研究と時局、紀要(神戸大学文学部) 査読無、39号、2012、pp.1-41

田中 康二、幕末の江戸歌壇 一枚刷『東都歌仙窓の枝折』をめぐって、国語と国文学、査読有、88巻5号、2011、pp.48-62

〔学会発表〕(計 6 件)

田中 康二、本居宣長の国文学、皇學館大学国文学会、2015.11.19、皇學館大学(三重県)

田中 康二、「敷島の歌」受容史、鈴屋学会、2015.7.18、松阪市(三重県)

田中 康二、国学者の歴史認識と対外意識 本居宣長『馭戎慨言』をめぐって、日本文学協会、2014.11.16、学習院大学(東京都)

田中 康二、文学史の構想 「歌詞展開表」について、鈴屋学会、2014.7.19、松阪市(三重県)

田中 康二、宣長国学における歌 敷島の歌・うひ山ぶみ・著書名 (シンポジウム「越境する日本思想史 思想と文学の垣根越え」)、日本思想史学会、2013.10.19、東北大学(宮城県)

田中 康二、賀茂真淵 古学と古風の間、鈴屋学会、2013.7.20、松阪市(三重県)

〔図書〕(計 7 件)

田中 康二、ペリかん社、本居宣長の国文学、2015、424

田中 康二他、水声社、生表象の近代 自伝・フィクション・学知、2015、480(133-151)

田中 康二、中央公論新社、本居宣長 文学と思想の巨人、2014、240

田中 康二他、笠間書院、江戸文学を選び直す 現代語訳付名文案内、2014、201(62-80)

田中 康二、新典社、国学史再考 のぞきからくり本居宣長、2012、256

田中 康二他、ペリかん社、江戸の文学史と思想史、2011、274 (102-148)

田中 康二他、世界思想社、和歌史を学ぶ人のために、2011、344 (178-196)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 康二 (TANAKA Koji)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：90269647

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：